

運動選手の自我同一性の探究とスポーツ経験 (V)

—運動選手の生育史における危機的場面—

中 込 四 郎

On the sports experience and the athlete's search for ego identity (V): Events of crisis occurring in athlete's life history

Shiro Nakagomi

The central premise of this article is that crises occurring in ones life history play a prominent role as a turning point in personality development. In addition, it is not simply necessary to determine whether there existed a crisis or not, but also it is essential to clarify how a person dealt with this crisis. The process of coping with crises is called crisis mode. In this paper, the process of coping with crises will be called crisis mode.

In order to collect data concerning crisis occurring in an athlete's life history, eighteen male and female athletes were interviewed. Almost all the subjects had been involved in competitive sports since pre-adolescence, and the age of subjects ranged from twenty to twenty-six years. The crisis modes were classified according to the degree of the subject's crisis awareness and the mutuality involved in the process of solving a crisis.

The main events among the extracted crisis in the athlete's life history were as follows: events of "relationship to coach", "injuries and slump", "determining ones course after graduation from high school", "environmental change", "continuation in athletics", "choice of career", and "retirement from athletics". These events were in approximate agreement with the sporting areas comprised in Nakagomi & Suzuki's scale of ego identity formation process. However these crises are not completely independant of each other because one crisis can induce or evolve into another crisis.

The various types of crisis mode were classified into four patterns, and these patterns were tentatively named as follows: Pattern I (active style), Pattern II (avoidance style), Pattern III (passive style), and Pattern IV (pending and/or continuing in crisis style). To explain the patterns, representative cases in relation to each pattern were given. As a matter of convenience, the psychological backgrounds behind these differences in patterns were discussed considering the individual and environmental factors.

序

青年期の心性に対して平穩説をとるか危機説をとるか、また心理的発達を連続的とするか、それとも非連続的であるか2つの対立した立場がある。後者の立場に立つと、各発達段階は量

的な差異によるよりも質的に異なることになる。本研究は、青年期が不安と動揺に満ちた危機的な時期であり、そして、こうした危機が人格発達の契機となり、そこでの発達の様相は、波状を呈すのではないかといった立場をとっている。

Erikson(1959, 1963)^{6,7)}は、青年期を自我同一

性形成に向けての危機 (crisis)^{#1}の時期とし、この危機に対決・克服することを青年の発達課題とした。さらに、それぞれの発達段階における危機を解決してはじめて次の段階の危機に十分対処できる準備が可能となるとしている。このような主張は、青年期にある運動選手の人格形成を考えるうえでも、重要な視点を与えてくれるようである。

中込や鈴木^{20,21,31,32}は、自我同一性形成への契機となると言われてきたこれまでの領域^{9,13,14}の外に、運動選手的生活空間を反映し、危機解決への相互性 (mutuality) を発揮する可能性のある領域を設定することにより、運動選手の同一性形成過程の特徴を検討してきた。それらの研究では、相互性を操作的に crisis, exploration, commitment の3側面に置き換え、数量的な処理を施した。しかし、研究を進めていく中で、各個人の危機様態 (crisis mode)^{#2}の比較を連続的な変量で扱うことには限界があるように感じられた。現時点での commitment がどのような危機様態を経てきたのか、そして、解決がどの程度なされたうえでのものかによっても、その意味を異にするようである。そして、設定されたそれぞれの領域 (危機的場面) の人格変容に与えるインパクトも個人差が大きいようである。また、先行研究で設定された領域が、運動選手にとって妥当であるのかもさらに確かめる必要がある。

選択決定を迫られたり、生活上の変化が生じることにより危機的場面がもたらされる。ライフ・サイクル (life cycle) の中で遭遇する危機的状況に関しては、“life change”, “life stress” といったテーマのもとに数多くの研究が行われてきている^{16,25,30,37}。これらの研究には、life stress といった危機が発達主体者に対して新たな適応を迫り、その結果、身体・精神的側面への影響がもたらされる、といった背景がある。主体が対象に対して適応していく過程には、主体ないしは対象自身の変化と、そして相互の働きかけを通じて、両者が共に変化することが考えられる。危機を契機として、人格変容が引き起こされるとするならば、そこに介在する変数を明らかにする必要がある。これまで行われてきた life change に関する研究では、危機事象のリスト化、および各個人間での危機のもつ意味、影響力を多次元的にとらえねばならないことを明らかにしている。しかし、人格変容に結びつく適応の過程 (対処行動) の分析に關

しては、わずかししか関心が向けられてこなかったようである^{2,35}。

本研究では、運動選手のスポーツを中心とした生育史の中で生じる危機的場面 (事象) を明らかにし、そして、危機様態の分類を試みることになる。また、危機状況への発展、および危機様態における相互性を規定している心理的背景について若干の考察をすすめたい。こうした試みは、その後行われるであろう危機様態と運動選手の人格変容 (特に自我同一性達成) との関係を明らかにする踏み台となるはずである。

方 法

18名の運動選手を対象として、次のような手順で面接・質問紙調査を行った^{#3}。

- #1 調査内容の説明・協力要請、自我同一性に関する質問紙 (自我同一性形成過程尺度²⁰、遠藤の自我同一性尺度⁵) の実施

↓
[分 析]

- #2 面 接 (思春期まで)

↓
[分 析]

- #3 面 接 (青年期を中心として)、面接終了後自我同一性質問紙 (EPSI)²⁹ を渡し次回に回収

↓
[分 析]

- #4 ロールシャットハテスト施行 (主に自我構造、対象関係の発達の査定を行う)

↓

- #5 面 接 (現在から将来への展望)、まとめ

以上のように各対象者からは、5セッション (各60~70分) にわたる調査協力を得た。#1に実施された質問紙は、自我同一性の達成の程度や形成過程に関する情報を得ると同時に、#2から行われる面接への動機づけおよびオリエンテーションも兼ねている。面接の内容は、スポーツ場面を中心

とした生育史とし、特にその中で危機的場面については、詳細な情報を得るために面接を深めた（一部の事例では、面接の過程で日常生活場面へと発展していくこともあった）。

個人的な生育史の特定の領域に関する情報を求めることから、本研究では焦点面接法の形を採用した。しかし、対象者に対して「これまでのスポーツ場面を中心とした生育を語ってほしい」といった最小限の指示により面接は開始されており、面接事態の構造は、非構造化面接あるいは非指示的面接といわれるものに近くなった。対象者は面接を通じて、過去の危機的場面を回想することになり、それをきっかけとして自己への問いかけを深めていくこともあった。特に、危機の未決・継続の事例にあっては、本調査への協力が自己の問題性を深く意識するような結果を招くことになった。したがって、#5の後半は本調査結果の概略を各対象者に慎重にフィードバックしながら、話し合いの場をもうけた(まとめ)。18名のうち1名は本調査を契機として、本人の希望により治療的面接へと移行し継続事例となった。

結 果

対象者の年齢は20～26歳であった。笠原¹²⁾の発達区分に従うならば、本研究で得られたスポーツを中心とした場面での生育史に関する回顧的資料は、児童期からプレ成人期までのものとなる。その中でプレ成人期までの資料が得られたのは4名であった。面接記録をもとに危機的場面を抽出した。そして、それらを資料とする個人別の生育史年表を作成し、分析・検討を加えた。なお本研究では、同一性尺度、ロ・テスト結果の分析ならびに生育史との対応は行わなかった。機会を改めてこれらの資料をもとに、危機様態と人格形成について報告するつもりである。

(1) 運動選手の生育史における危機的場面

以下のような危機的場面が抽出された。各個人がこれらの場面に対して、危機を意識する程度、そして危機解決・克服への対処の仕方にはかなりの個人差が認められた。

〔初期・同一種目継続に関するもの〕：それまでに継続してきたスポーツ種目への興味の低減、あるいは他種目への興味の高まりにより、その後の

継続への迷いを生じることがある。比較的早期から専門的にかかわりあいをもつようになった種目（例えば、水泳）や、それまでの環境にはなかった興味あるスポーツ種目（例えば、ラグビー）に出会った者の一部が経験するようである。

〔対指導者関係〕：顧問教官・コーチとの人間関係あるいは指導方針に対する不満や悩みから生じる危機。

〔勉強とスポーツの両立〕：成績の低下や進学指導を契機として生じるようである。本対象者の中では、大学時にこの種の危機に直面する者は少ないようである。

〔中・高校期ケガ、スランプ〕：高校までに、スランプによる危機を迎える者はわずかであった。

〔志望大学の選択、高卒後の進路決定〕：大学進学にかかわる選択決定が中心であった。大学生ならびに学生経験者16名のうち3名を除き、本対象者は志望学部の選択ではなく、体育系大学の選択および企業チームあるいは大学チームのどちらでプレイするかといった選択の迷いであった。また、決定の過程で、両親の意見・希望の違いから対立を経験する事例もあった。

〔入学・就職後の環境変化〕：競技レベル、指導方針・戦略、チーム内の上下関係を中心とした集団の雰囲気、等の違いからくるギャップへの適応過程で生じる危機。また、生活環境面での変化に関するものもある。

〔大学期ケガ、スランプ〕：レギュラーポジションの獲得の見込みのなき、あるいはレギュラーメンバーから漏れることによる危機も含む。わずかではあるが、ナショナルチームの代表選考から漏れることにより危機を経験する例もあった。

〔専攻決定〕：大学年次後半、それまでの実技による主専攻から各理論系への帰属決定に伴うものである。一部の者にとっては、中・高時に経験する「勉強とスポーツの両立」といった問題へと発展する。

〔スポーツの継続〕：まだ現役プレイヤーとして可能な年齢ではあるが、継続への問いかけを行うことがある。これは所属運動部からの離脱、そして生き方や価値観の問いかけへと発展することがある。

〔将来の進路、就職〕：大学卒業後の進路の選択決定に伴う危機。本対象者の多くは、今まさに危機、あるいは迎えようとしている年代であった。

また、この領域における危機は、卒業あるいは4年次に直面するだけでなく、入学当初の希望が(多くは教員志望)在学中に変化することによって生じることもある。

〔現役引退〕：競技選手としての終止符を打たねばならない時期にさしかかり、諸々の心理・社会的変換を迫られる。これはアイデンティティの再確立といった課題を突き付けられることにもなる。本対象者の中では、3名の者がその問題に直面していた。

(2) 「危機様態」に関する面接からの抜粋

上述した危機的場面に対して、危機を意識する程度や、危機解決・克服への対処行動における相互性の程度に基づき、危機様態の分類を試みた。以下では4つのパターンを想定し⁴⁾、面接記録からの抜粋により各パターンを紹介する。

〔Pattern I-1〕：次の事例は、25歳女子選手である。対指導者との間に直接的な危機が生じた例ではないが、運動生活の中で派生した諸問題を解決していく過程に、本事例と指導者(顧問教官)の間に繰り広げられた特徴的な関係を認めることができる。高3よりチームのキャプテンとして、トレーニング計画や集団運営、そして自分自身の技術面での問題等を指導者に投げかける機会が多くなった。「先生から“しようもない練習しているな—”と言われるのくやしいからいろいろ考えた。とにかく先生は、“答えは自分で出せ!”と、答えをすぐには教えてくれず、ヒントを与えてくれるだけだった。」また、同級生ペアと技術・戦略について意見の食い違いが生じ、喧嘩の状態になることもあった。それに対して、「とことん喧嘩しなければならないと思った時は、先生は黙ってみていたよう。」本事例の他の問題に対しても同様に、この指導者は自身での解決を期待していたようである。「先生はちょうど良い時期にタイミング良く介入してくれてくれたように思う。」

〔Pattern I-2〕：21歳女子選手のケガを契機とした危機様態である。将来を期待され入学したが、試合中(1年次6月)膝を痛め3週間ギブスで固定、その後同一箇所のケガを繰り返すが、3年後半より選手として再び活躍するようになる。「その頃すごく焦っちゃって少し良くなると試合に出たくなるし、推薦だからもっと頑張らなくてはと思った。」「授業をさぼるようになったり、何

をやっても手につかなかった。」ケガを契機とした本ケースの焦燥感は日常生活へも波及したようである。2年生になりプレーヤーを諦めかけていたが、チームメイトや指導者からの励ましや理解を得、競技の継続や自己洞察を深めるきっかけとなる。「仲間は私のことを支持、認めてくれていた。プレーの面で視野が広いからその持ち味を伸ばして欲しい。」また、「先生は、全部をやるより武器をもて。今はオールラウンドプレーヤーはいらない。」と言われた。「自分としてはこの仕事をすれば良い、といったことがわかってきた。自分が出不来ないことまでやろうと1、2年の時はしていた。本当の自分を見出だせば良い、と思えるようになった。」

〔Pattern II-1〕：21歳男子運動選手における将来の職業選択過程の断片である。本事例は、障害関係の領域にも関心があり、これまでの在学期間中、8単位ほどその関係の授業を履修してきた。他領域の資格をもとろうとしてきたことは、「もし推薦入学がダメだったらたぶん浪人して、将来福祉関係に進むためにF大学を受験していただろう。」という気持ちの継続からであろう。このように、他領域への興味を持ち合わせながら、3年次後半クラブ顧問より「お前の就職は見つけたぞ。お前M県に行くか。」と就職の話を持ち掛けられた。本人は、もし体育教師になるなら、母親の希望も含めてK、A県の採用試験を受けるつもりでいた。最初は軽い気持ちで受けとめ決定を伸ばしていたが、「私が決めるよりも先生の方が先行して決めた。きちっとした就職先があった方が自分にとってbetterだと思ったので、後は先生に任せた。」

〔Pattern II-2〕：21歳女子選手の例である。高3の後半進路決定を迫られ、「最初の実業団でプレイするか迷った。進路指導の先生からは、一応進学組の方にしておけと言われていた。」両親から進学への反対があり一旦は就職を決定。その事をクラブ顧問に話したところ、「お前は～をやりたいんだらう。オレに任せておけ。」と言われ、その後推薦入学のための書類の用意や手続きもしてもらった。また、両親の説得も顧問が行う。「結局、私は何もませんでした。」

〔Pattern III-1〕：20歳男子選手の例である。大学運動部における上下関係の厳しさや練習内容の質的ギャップを強く意識する。また、「“5月病”

て言うんですか、あれにずうっとなっていた。もともと理系の大学でプレイしたかったので、授業に出ていても何故体育に来たのかなーと思ってばかりいた。夏休みまでかなり悩み「4年間我慢すればなんとかなるだろうと思いなおしたら、ややもち直すことができた。」この間、「自分はあまり同級生と話すことはなく、また顧問にも相談しなかった。一人でグチばかりこぼしていた。」

〔Pattern III-2〕：21歳男子選手の高校時の対指導者関係における危機様態である。高校時の指導者は、専門種目を異にする先生であり、実技指導よりも日常生活面で厳しかった。しかしその厳しさは、「納得のいくことで怒られるのではしょうがない。ただ“～部だから～せよ”と無理難題を吹っかけてくる。」といった不信感を醸し出すような対指導者関係であった。また、このような関係は、「先生と一緒にいる時は、“必ず話せ!”、こちらから話題をつくって話しかけないと、殴られたり、立たされることがあった。……とにかく先生は気分屋なんです。だからいつも気を使っていた。」といったところにも現われている。そんな先生に対して、本事例たちは、当然のごとく不信感と同時に強い反発心を生み出し、退部あるいは練習を休むといった集団行動に出る。しかし、それを契機として事態は変わることがなかった。「話してもダメ、話合いができる雰囲気ではない。先生の言うことは黒が白であっても、先生の言う通りにならなければならない。」と、本事例は対指導者関係に強い不満を抱きながらも、以後あえて問題を起こすようなことはしなかったようである。

〔Pattern III-3〕：23歳男子運動選手の大学生活への適応過程に関するものである。入学前、志望大学運動部の競技レベルが高いことから、自分が通用するかどうか若干の不安があった。「練習はきついし、レベルの違いが大きかった。だから、卒業するまでに1回ベンチに入れば良いと思っていた。まわりの皆が上手だから、自分としてはこんなもんかと思っていた。上を見てもきりがないので……。練習だけはさぼらずやってきたつもり。」日常生活面では、「ぜんぜんホームシックにかかることはなかった。暇な時はパチンコやマーチャンばかりしていた。」

〔Pattern IV-1〕：「将来の職業」について計画を尋ねた折、26歳男子選手から語られたものである。先輩や先生の薦めで大学院を受験したが不合

格。「落ちることを願っていた訳ではないが、今まで、自分の人生を振り返って見ると、ルールを引かれていたみたい。それを一生懸命上ってきた気がする。無我夢中でやってきたことを振り返る時期が欲しかったみたい。だからその当時、落ちても比較的楽観的だった。」「大学卒業してこれから何をすべきかわからない。大学時代は～にかけた。社会に出る前に本当に自分を練り直す必要があると思った。もし、しなかったらグシャンとつぶされると思った。」その後大学院入学を果たし、半年後に修了を向かえる今日も、「今も何かフラフラしていて、目標が定まらない。」と、同一の問題を継続している。

〔Pattern IV-2〕：留年を決定した23歳男子選手の例である。現在体育専攻4年生である彼は、地元I大学の農学部に合格していたが、夏休み後退学・浪人し翌年T大学体育を再受験し現在に至った。再受験の原因は、体育への強い関心ということからよりも、「当時具体的にいきたい大学もなく、たまたま父が農試関係に勤務していたから農学部を希望。特別行きたいところもなかった。」といったところが主な原因のようである。入学後、「体育の場合、体育の先生になることが多いので、特に希望している訳ではないが何となく先生になるんじゃないかなーと思うようになった。」彼は大学入学後、本格的に始めたスポーツ種目に強い興味をもつようになり、「留年してもう少し～をしたい。このまま就職して体育の先生になったらもうこれまでのように競技を続けることはできない。留年の1年間、～の試合にたくさん出て技術も高めたいし、自分の限界がわかったら今度は指導者となっていきたい。」と、留年を決定していった。

考 察

18名の運動選手のスポーツ場面を中心とした生育史から、結果で述べたような危機的場면을認めることができた。それらは、先に中込・鈴木(1985)²⁰⁾によって作成された「自我同一性形成過程尺度」の中でとりあげられた領域とほぼ対応しているようであった。

Raphael, D. & Xelowski, H.G. (1980)²⁴⁾は、Marcia¹⁴⁾の同一性地位アプローチ(identity status)を高校生に適用し、同一性達成課題へのか

かわり方が年齢あるいは発達段階に応じて、その意味合いが異なることを指摘している。また、Waterman, A.S. & Geary, P.S. (1974)³⁴⁾は、高校時より継続しての同一性達成者と、大学入学後の危機、傾倒を通して形成した同一性達成者とは質的に異なることを明らかにしている。抽出された危機的場面の中には、〔初期・同一種目継続に関するもの〕と〔スポーツの継続〕、そして、〔中・高校期ケガ、スランプ〕と〔大学期ケガ、スランプ〕といったように、発達段階を異にして同種の場面が重複して取り上げられている。これは、同一の危機的場面であっても、発達段階のどこで生じたかによって、人格発達への影響は異なるからである。また、ある一つの危機的場面での問題が、他の場面へと発展、あるいは変容していくことも認められる。例えば、ケガ、スランプを契機として、スポーツの継続への迷いに発展し、さらに生き方・価値観への問いかけに変わることもある。このようなことから、本研究で明らかにされた11の危機的場面は、完全に独立したものと考えることができないようである。

次に、危機を意識する程度と危機解決に向けての相互性の程度に基づき、分類された4つのパターンからなる危機様態を説明する。

Pattern I-1 (以下では、P-I-1と記す)は、キャプテンとしての役割遂行やペアとの間に生じたトラブル、P-I-2ではケガが契機となり、危機が認められる。そして、その後の解決・克服に向けての相互性の程度は高く、これがPattern Iの特徴といえる。Pattern IIの2名は、高校卒業後の進路および将来の職業選択決定という危機的場面に出会いながらも、他者から解答を得ることにより、それが危機を強く意識する契機とはなっていない。したがって、その後の対処行動の展開もみられないようである。Pattern IIIは、大学生活への適応過程および対指導者関係で危機を強く意識しながらも、危機解決への相互性が展開しなかった例と言える。Pattern IVの2人には共通して、将来の職業選択を基盤とする自我同一性の探究といった積み残し課題(継続的危機)に対して、今まさに解答を求めべく歩み出そうとする状態が考えられる。しかし、P-IV-2の方は、やや危機感が低いようである。

以上4つのパターンを危機様態の特徴から、Pattern I(積極型)、Pattern II(回避型)、Pattern

III(消極型)、Pattern IV(未決・継続型)と呼ぶことができる。こうしたパターンの違いを生み出す要因は、個人差要因だけに求められるのではなく、相互性を抑制したり促進したりする広義の運動環境要因も関係しているようである。

同一性形成に向けての危機(identity crisis)に対して、環境側の許容性が高い場合、同一性達成(identity achievement)型の者が多く出現すると言われている^{1,17,28)}。このような主張を、本研究で得られた資料からさらに討議を深めてみることにする。

P-I-1とP-II-1&2の事例は、契機となった危機的場面は異なるが、危機解決への相互性を規定した共通要因の一つとして、指導者をあげることができる。前者では解決の為のヒントだけを指導者が与えており、後者は発達主体者に対して選択の余地の無い解答を与えている。解決の糸口の絶対化がなされることにより、P-II-1と2の進路決定の危機は、既に本人の手によって解決すべき問題ではなくなっているようである。また、この事例にとって、その時の先生のアドバイスは、社会の側が自らに対して支持的に働くものと思うことによっても、自らの選択決定への歩みをとめることになると考えられる。ここでの危機に対して、本人と指導者の間での解決にむけた相互性を期待するならば、職業、進路決定という主題は2人が共有する体験の場あるいは状況でなければならない。プレ成人期に至り、なお同一性危機にあるP-IV-1の「今まで、自分の人生を振り返ってみると、ルールを引かれていたみたい。それを一生懸命上ってきた気がする。」は、上述してきた内容を象徴的に語っているようである。

P-I-2にみられるケガを契機とした危機様態での仲間や先生との関係にも注目する必要がある。本事例に対して、彼等が情緒的慰めのみを与えるだけであったならば、彼女は解決へと歩み出さなかったのではないかと考えられる。「全部をやるより武器を持って。今はオールラウンドプレイヤーはいらない。」と本事例に対して先生は言っている。こうしたアドバイスは、危機の中にあって焦燥感を募らせ、空転状態にある彼女に対して、現実否定の一面をもっているようである。そして彼女は、自己の否定的(欠陥)一面を指摘され、それを補うような形で歩み出していると言える。

相互性を規定した環境側の要因だけについて検

討してきたが、P-III-1, 2, & 3における相互性の欠如は、各個人のもっているパーソナリティ要因も大きく関係しているようである。Marcia¹⁵⁾、長尾ら¹⁹⁾、Donovan⁴⁾、Neuber & Genthner²²⁾、Josselson¹¹⁾らの研究結果から、外界に対して開かれ、積極的に働きかけるといったような相互性を促進する個人差要因が考えられる。P-II-3の「……まわりの皆が上手だから、自分としてはこんなもんかと思っていた。上をみてもきりがないので……。」からは、自己拡張欲や向上欲の低さを感じられる。そして、P-III-1の「自分はあまり同級生と話すことはない、また顧問にも相談しなかった。……」や、P-III-2の「……とにかく先生は気分屋なんです。だからいつも気を使っていた。」からは、対人関係面での防衛性の強いことが伺われる。このようなパーソナリティ特徴は、さらに広範な生育史を尋ねることにより、両親あるいはそれに代わる人々との過去に展開された交流体験の希薄さが関係しているのかもしれない。また、現時点での各個人がとりうる危機様態のパターンは、それまでの生育史で経験してきた危機への対処行動によって規定される一面もある。本研究の中では検討を加えていないが、同一個人の生育史を青年期に限定してながめると、危機場面の違いによる危機様態のパターンの違いよりも、生育史を通じたパターンの近似傾向の方が目に付くようである。ここでは便宜的に、環境と個人にかかわる要因を独立して述べてきたが、この両者が相互に働き合って、危機様態が特徴づけられるのである。

本論文は生育史の中で生じる「危機」が、人格発達への転回点として重要な役割を演じているといった前提に立ち、危機様態の分析を試みてきた。人格形成（特に自我同一性）に対して、危機がどのような働きかけをしているかについては触れてこなかった。「青年期における人格形成の一つの特質は、自覚的かつ主体的な“自己形成”にあると考える。」³⁶⁾といった主張に反するような歩み（危機様態）をとるパターンも見出された。しかし本資料だけからでは、それらの人格形成に与える影響について討議を深めることはできない。今後はさらに、危機様態と人格形成の関係について多方面からの検討が必要のようである。

まとめ

生育史の中で生じる危機（crisis）が人格発達への転回点（turning point）として、重要な役割を演じている、といった主張を前提としてこの研究は進められた。

本研究の中では、面接法を用いて、運動選手のスポーツを中心とした生育史の中で生じる危機的場面を収集した。また、それらの危機的場面に対する危機意識と、解決に向けての相互性の程度を手がかりとして、危機様態（危機への対処行動の過程）の分類が試みられた。

生育史の中から抽出された主な危機的場面として、〔対指導者関係〕、〔ケガ、スランプ〕、〔高卒後の進路決定〕、〔環境変化〕、〔スポーツの継続〕、〔将来の職業〕、〔現役引退〕等が認められた。危機様態のパターンとして、Pattern I（積極型）、Pattern II（回避型）、Pattern III（消極型）、Pattern IV（未決・継続型）の4つのパターンに分類された。それぞれのパターンに対して、本面接記録からの抜粋により、代表的な事例を紹介した。また、危機状況への発展、および危機様態における相互性を規定している心理的背景について若干の考察を加えた。

付記：本研究の一部は、日本体育学会第37回大会にて発表した。また、この研究は昭和60年度科学研究費補助金奨励研究（A）60780121によった。

なお、登場していただいた事例について、個人のプライバシーへの守秘義務から、付帯的情報について多くを具体的に語ることを控えた。そのことが、各危機様態を紹介する事例（資料）として、説明不足あるいは表現の不的確の原因の一つとなったかもしれない。しかし、それ以上に、本研究の面接対象となっていたいただいた選手の皆さんには、心から感謝いたしております。

注

注1) Eriksonは、「アイデンティティの危機とはいまや、成長と回復と分化の資源を糾合しつつ、発達は何とかなされねばならないときの、必要不可欠の転回点（turning point）や決定的瞬間（a crucial moment）を指すものとして、受けとられつつあるのである。……」と、同一性形成過程における危機に意味づけを与えている

(Identity: Youth and crisis, 1968)⁹⁾。このように、人格発達の過程で“Crisis”は、文字どおりの破壊を意味するのではなく発達への契機と考えることができる。

弁証法的発達論を唱える者は、“contradiction” “conflict” という用語を用いるが、同義の部分が多いようである³⁾。その中でも特に、Riegel, K.F.の「危機は創造的発達のチャレンジである。」「危機は個人と社会の間での相互作用の質的变化を生み出す。」(1975)²⁶⁾、「多くの危機は、新たな発達を導く建設的な出会いを示す。」

(1976)²⁷⁾といった主張の抜粋からもCrisisを発達への契機として考える立場をくみ取ることができる。また、青年期危機を迎えた事例への心理臨床的にかかわりの中で、「危機は危険の要因とチャンスの要因を持つ分岐点を意味する。」²³⁾といったことを実感することがある。

注2) 同一性形成過程における危機の様態を論じる場合、同一性拡散状態をとりあげることがある³³⁾。しかし、本研究では、危機への対処行動の過程を「危機様態」としている。EriksonのVI段階の発達課題（親密さ対孤立）に限定し、危機解決様式を明らかにしている伊藤¹⁰⁾の立場に近いようである。

注3) 18名の対象者のうち1名は、本研究者が担当した相談ケースからのものである。

注4) 危機様態の分類にあたっては、危機意識の程度、そして危機解決に向けての相互性の程度（探究・努力の広がりや深まり）の2つの要因に基づいた。両要因の有無を手がかりとし、組み合わせを行うと4つのパターンが理論的には導かれることになる。その中の「危機・無一相互性・有」といったパターンを、本事例の中では認めることができなかった。これは本研究で用いた面接が、危機的場面に焦点づけられたことから、危機を意識しなかった場面でのその後の行動へ、対象者らの回顧する機会を狭めてしまったのかもしれない。そのかわり、危機が解決されず引き続き危機状態にあり、解決を今後の課題とするパターンが見出された。さらに、危機様態の質的分析を深めていくことにより、新たな分類が付加されることになるのかもしれない。また、本論文の4つのパターンの名称も、今後さらに各パターンの心理的特徴（自我同一性形成を中心とした人格発達）を明らかにしていくなかで、検討を加えていくことになる。

引用・参考文献

1) Adams, G.R., & Fitch, S.A., “Psychological environments of university departments:

Effects on college students' identity status and ego stage development,” *Journal of Personality and Social Psychology*, 44: 1266-1275, 1983.

- 2) Bandura, A., “The psychology of chance encounters and life paths,” *American Psychologist*, 37-7: 747-755, 1982.
- 3) Clayton, V., “Erikson's theory of human development as it applies to the aged: Wisdom as contradictory cognition,” *Human Development*, 18: 119-128, 1975.
- 4) Donovan, J.M., “Identity status: Its relationship to Rorschach performance and to daily life pattern,” *Adolescence*, 10: 29-44, 1975.
- 5) 遠藤辰男(編), *アイデンティティの心理学*, ナカニシヤ出版, 1981.
- 6) Erikson, E.H., *Identity and the life cycle*, International Universities Press, 1959.
- 7) Erikson, E.H. (1963), *Childhood and society* (2nd ed.), Norton, 仁科弥生 (訳), 幼児期と社会, I・II, みすず書房, 1977・1980.
- 8) Erikson, E.H. (1968), *Identity-Youth and crisis*, Norton, 岩瀬庸理 (訳), 青年と危機, *アイデンティティ*, 金沢文庫, 1973.
- 9) Grotevant, H.D., Thorbecke, W.L., and Meyer, M.L., “An extension of Marcia's identity status interview into the interpersonal domain,” *Journal of Youth and Adolescence*, 11: 33-47, 1982.
- 10) 伊藤研一「親密さ対孤立」の危機解決様式に関する実証的研究」*東京大学教育学部相談室紀要*, 5: 123-128, 1982.
- 11) Josselson, R.L., “Psychodynamic aspects of identity formation in college women,” *Journal of Youth and Adolescence*, 2: 3-52, 1973.
- 12) 笠原 嘉「今日の青年期精神病理像」笠原・清水・伊藤 (編), *青年の精神病理*, 弘文堂, 1966, pp. 1-27.
- 13) 加藤 厚「大学生における同一性の諸相とその構造」*教育心理学研究*, 31-4: 20-30, 1983.
- 14) Marcia, J.E., “Determination and construct validity of ego identity status,” Unpublished doctoral dissertation, The Ohio State University, 1964.
- 15) Marcia, J.E., “Identity six years after: A follow up study,” *Journal of Youth and Adolescence*, 5: 145-160, 1976.
- 16) 三川俊樹・中西信男「危機的状況と対処行動に関する研究(1)」*日本教育心理学会第27回大会発表論文集*, pp. 420-421, 1985.
- 17) Morach, M.A., “Working class membership

- and the adolescence identity crisis," *Adolescence*, 15: 313-320, 1980.
- 18) 村瀬孝雄「青年期危機概念をめぐる実証的考察」笠原・清水・伊藤 (編), *青年の精神病理*, 弘文堂, 1976, pp. 29-52.
 - 19) 長尾 博・遠藤辰男他「Ego-identityの研究(9)―自我同一性障害に対するテストバッテリーの試みとその考察―」*日本心理学学会第41回大会発表論文集*, pp. 856-887, 1977.
 - 20) 中込四郎・鈴木 壮「運動選手の自我同一性の探究とスポーツ経験 (I) ―Eriksonの相互性からみたスポーツ経験の特徴―」*体育学研究*, 30-3: 249-260, 1985.
 - 21) 中込四郎・岸 順治・井窠 敬「運動選手の自我同一性の探究とスポーツ経験(IV) ―相互性の程度と対象表象―」*筑波大学体育科学系紀要*, 9: 21-29, 1986.
 - 22) Neuber, K.A., & Genthner, R.W., "The relationship between ego identity, personal responsibility, and facilitative communication," *Journal of Psychology*, 95: 45-49, 1977.
 - 23) 岡野フミ子「青年期危機を迎えたある少年との面接過程―自力で歩き始めようとしたE君―」*心理臨床研究 (九州大学)* 3: 13-21, 1984.
 - 24) Raphael, D., & Xelowski, H.G., "Identity status in high school students: critiqued and a revised paradigm," *Journal of Youth and Adolescence*, 9-5: 383-389, 1980.
 - 25) Redfield, J., & Stone, A., "Individual viewpoints of stressful life events," *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 47-1: 147-154, 1979.
 - 26) Riegel, K.F., "Adult life crises: A dialectic interpretation of development," in Datan, N., & Ginnsberg, L.H. (Ed.), *Life-span developmental psychology: Normative life crises*, Academic Press, 1975, pp. 99-128.
 - 27) Riegel, K.F., "The dialectics of human development," *American Psychologist*, 689-700, October, 1976.
 - 28) Rowe, I., & Marcia, J.E., "Ego identity status, formal operations, and moral development," *Journal of Youth and Adolescence*, 9: 87-99, 1980.
 - 29) 佐方哲彦「青年期の自我同一性形成―EPSIによる発達課題の達成過程の解明―」*青少年問題研究*, 34: 49-64, 1985.
 - 30) Sarason, I.G., Johnson, J.H., and Siegel, J.M., "Assessing the impact of life changes: Development of the life experiences survey," *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 46-5: 932-946, 1978.
 - 31) 鈴木 壮・中込四郎「運動選手の自我同一性の探究とスポーツ経験 (II) ―競技レベルの低い選手と高い選手の比較―」*岐阜大学教育学部研究報告 (自然科学)*, 9: 89-98, 1985.
 - 32) 鈴木 壮・中込四郎「運動選手の自我同一性の探究とスポーツ経験 (III) ―性差の検討―」*岐阜大学教育学部研究報告 (自然科学)*, 10: 61-71, 1986.
 - 33) 鎌幹八郎「自我同一性の危機の様態に関する臨床心理学的展望」*広島大学教育学部紀要第一部*, 23: 329-342, 1974.
 - 34) Waterman, A.S., & Geary, P.S., "Longitudinal study of changes in ego identity status from the freshman to the senior year at college," *Developmental Psychology*, 10-3: 387-392, 1974.
 - 35) Whitbourne, S.K., "Openness to experience, identity flexibility, and life change in adults," *Journal of Personality and Social Psychology*, 50-1: 163-168, 1986.
 - 36) 山田良一「青年期における自我形成の諸相 ―女子青年の日記分析を通して―」*山梨大学教育学部研究報告 (人文社会科学系)* 29: 146-153, 1978.
 - 37) Yeaworth, R.C., York, J., et al., "The development of adolescent life change event scale," *Adolescence*, 15: 91-97, 1980.